

鎌倉善宝寺寺地図小考

——戦国期鎌倉の寺院と門前の町——

福 島 金 治

はじめに

戦国期の鎌倉を描いた絵図に善宝寺寺地図（神奈川県相模原市緑区青山〔旧・津久井郡津久井町〕、光明寺所蔵）がある。絵図には年紀がないが、光明寺所蔵の明応六（一四九七）年の善法寺分年貢注文が一連のものともなされ、同じころの絵図と考えられてきた。その年代は明応四・七年の地震と重なっていることから、地震による鎌倉の被災状況をうかがう素材ともされてきた。

研究の骨格は『鎌倉市史 総説篇』に示されており、①善宝寺寺地図と善法寺分年貢注文は同一寺院を対象としたもの、②注文が坪で記されているのは明応年間に丈尺制から在家単位に変わったことを表し、それは鎌倉が「田舎の繁華な集落に過ぎなくなってしまう」ことを示すこと、③注文の年貢は地子で中座も重視すべきであるとされた。^①次に、善宝寺の実態は貫達人・川副武胤著『鎌倉廃寺事典』に、宗旨不明、大

町・米町に所在した寺院、位置は教恩寺付近とされた。^②この見解は三浦勝男氏執筆の『鎌倉の古絵図』に継承され、置石は段葛で下馬四ツ角近くまであったこと、下方に描かれた橋は延命寺橋、法華堂は本覚寺の寺域、右上の一棟は夷堂、「善宝寺の地」は現在の教恩寺の敷地にあたる^③とされた。以上の内容は寺地図の基本情報といえる。

明応の地震による被災状況などを探る研究も寺地図と注文の検討を通じて行われてきた。山本武夫氏は『鎌倉大日記』にある明応四年の海水が千度壇（段葛）まできたことを傍証する素材に寺地図を使用し、明応の大地震の前年の同六年には米町は青物屋・紙屋・銀細工・職人などが住む商業地区を構成していたとされた。^④また、金子浩之氏は静岡県伊東市宇佐美遺跡が一五世紀末の津波堆積物の遺跡で明応四年の地震の可能性が高いことを確認し、丈尺制から坪単位の記載の変化は明応四年の津波の結果であり、注文は明応四年の都市破壊から復旧した二年後のすがたを記したものとされた。^⑤さらに、浪川幹夫は、注文は年貢の額と作人を記したものとし、光明寺と善宝寺を本末関係にあると位置づけられた。^⑥

積み重ねられてきた研究を振り返ると、いくつかの問題がある。それは、①注文と寺地図では「善法寺」「善宝寺」と異なるのに、研究は両者を同一として考察してきたこと、②寺地図と注文の基本的な性格の検討が不十分な点である。この問題は、光明寺文書の伝来と不可分であり、川本慎自氏が指摘された鎌倉山崎・津久井桐ヶ谷の二つの宝積寺の問題を念頭に検討することとしたい。^⑦

なお、引用史料は『神奈川県史 資料編（三上）』は神泉、『鎌倉遺文』は鎌遺、『金沢文庫古文書』は金文と略記し、津久井光明寺文書は

『津久井町史 資料編 考古・古代・中世』から引用し光明寺と略記し文書番号を記しておいた。

一 善宝寺地図の検討

まず、善宝寺地図をこれまでの研究成果を参照しつつつみておこう。⁽⁸⁾

図版1は善宝寺寺地図、図版2はそれを翻字したものである。絵図の形状は、法量が二八・一cm×三九・八cm、「北」「南」の文字のところには折りじわが残る。折れじわから二つ折りでの保存とみられ、本来は二紙の続紙で横の長さは約四〇cmほどとみられ、ほぼ正方形の絵図であったと推定される。残存部分の紙背には文字等の記載はみられない。欠落した右側の部分には端裏書があつて、そこに絵図の正式名称等が記されていたと推測される。寺地図の文字をみよう。方角は「北」「西」「南」、施設名称には「置石」「法華堂」、地名等には「米町」「善宝寺々内」「善宝寺々地」がある。⁽⁹⁾ 欠落部分には「東」の文字と建物や道などが描かれていたものと思われる。

次に、寺地図の表現をみてみよう。「置石」は桝状の重なりとして描かれており段葛をさす。東西に連続する道の先にある橋と若宮大路が直交しており、ここが下の下馬橋付近をさす。「米町」の文字は道の両側の家並みが対面するように記されており、ここは町屋と考えてよからう。次に、「善宝寺々地」は笹竹のような植物で囲われた区画として描かれ、その内部に建物は描かれていない。⁽¹⁰⁾ その東側には大きな建物が描かれているが、これがどのようなものかは不明である。一方、えびす堂川（滑川）とみられる川は大きく屈曲し、北から流れてくる西側の川

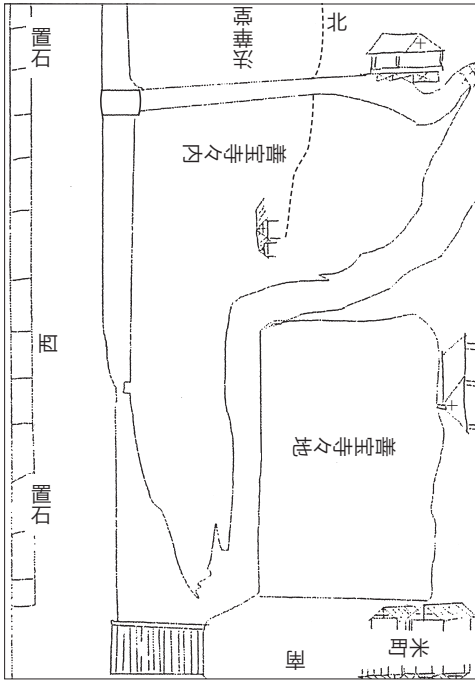
（扇川）と合流する。北には「法華堂」があり西側の橋から東西を結ぶ道があり、北東の隅には建物と橋がある。この建物が夷堂で、橋は夷堂橋となる。

右の内容を、阿部正道・安田三郎両氏作成の中世鎌倉の絵地図（図版3）と比較してみよう。⁽¹¹⁾ その範囲は、西が若宮大路、南は延命寺橋を渡り大町に向かう道から北側の部分、北は若宮大路から本覚寺の駐車場にかかる橋付近から東に夷堂橋にむかう部分が「法華堂」と「善宝寺々内」を分ける道となろう。「善宝寺々内」には二棟の建物と林が描かれている。善宝寺の建物の一部を表現したものかもしれない。これ以外は何も描かれていない。意図的に描かれていないのか、二棟以外には建物が描かれていないのか、判然としない。そして、注目すべき点は密接な関連があるはずの「善宝寺々内」と「善宝寺々地」の間に橋がないことである。現在もここに橋はない。えびす堂川（滑川）は深く切り込んだ川で、川底は岩盤が露出してゐる。この景観は現在とさほど差はないのではなからうか。

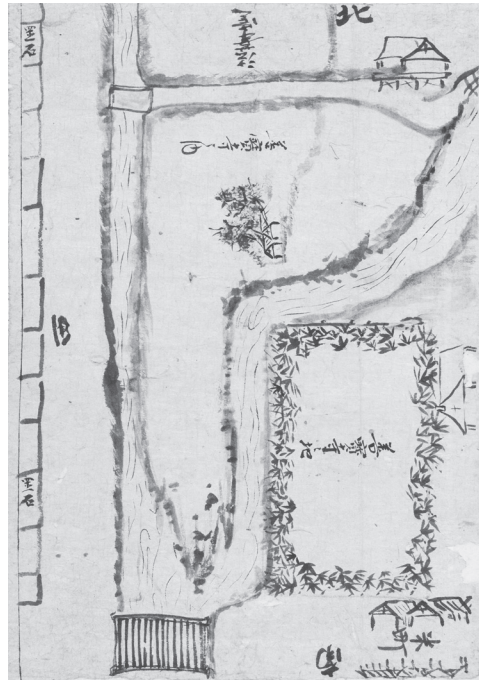
それでは寺地図の欠落部分にはどの程度の場所が描かれていたのだろうか。東北の隅の夷堂橋は一部分の記載となっており、ここにつづく小町大路が描かれていただろう。「善宝寺々地」の北側の東の先は常栄寺の門前あたり、米町の東側には大町の鎮守・八雲神社がある。この付近の家並みが描かれることは、紙幅から推定しても描かれていないとみてよからう。これを昭和二九（一九五四）年の「鎌倉市都市計画図」⁽¹²⁾の上を示すと図版4のようになる。実線が絵図の範囲、破線が東側の欠落部分の想定区域である。

それでは、この寺地図の作成目的は何なのであろうか。手がかりは、

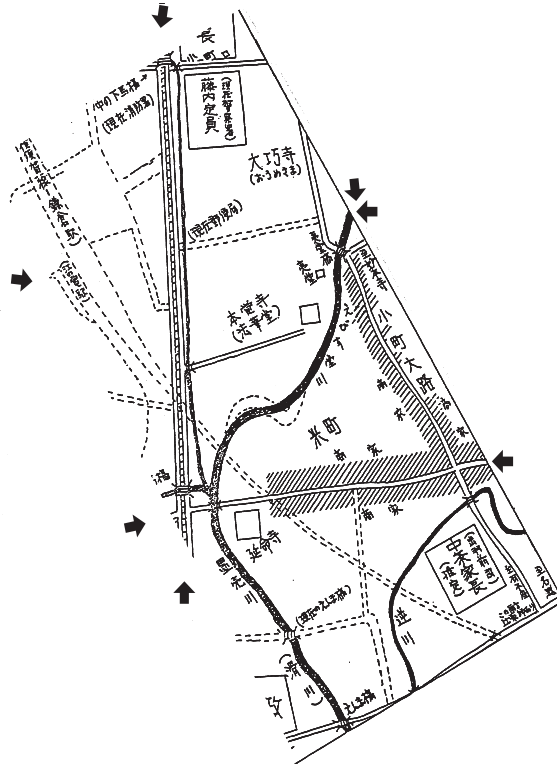
鎌倉善宝寺地図小考(福島)



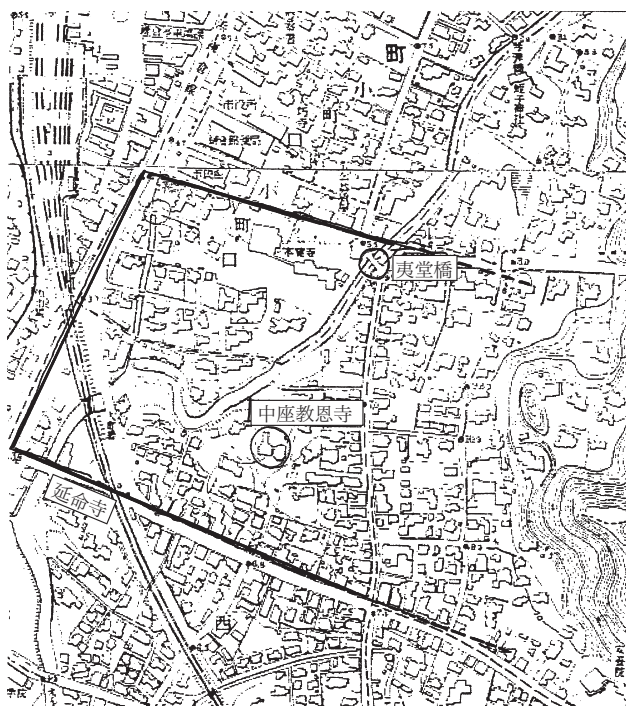
図版2 善法寺寺地図(翻字)



図版1 善宝寺寺地図



図版3 中世鎌倉の絵地図(原図、阿部正道・安田三郎)
矢印は絵図の範囲



図版4 善法寺寺地図の区域想定図
 (「鎌倉市都市計画図」昭和29 [1954]年)

「善宝寺々内」「善宝寺々地」の記載であろう。「寺地」と「寺内」を記す著名な文書は、文永六(一二六九)年の金沢頭時寺領寄進状案で、以下のようなものである(金沢文庫文書、鎌遺一〇五二三)。

寄進

武蔵国金沢称名寺々内寺外敷地事

右、敷地者、任所副進絵図之際目、可令領知給之状如件、

文永六年十一月三日

越後守顕時在判

この文書は南北朝期に称名寺が訴訟のために作成した偽文書で、応安

八(一二七五)年八月六日に鎌倉府が称名寺の「当寺内外敷地」を安堵した関東管領上杉能憲奉書案(神泉四七四六)と同筆と確認されている⁽¹³⁾。寺内・寺外の敷地を安堵する際に証拠として提出されたものに「絵図」があった。安堵に関わる絵図であればそれに類する言葉が入って問題はないわけであり、この点から善宝寺寺地図は寺の敷地を証明する絵図だったと想定される。同様のことは、覚園寺宛の文和二(一二三三)年の足利尊氏御教書にもうかがえる(覚園寺文書、神泉四二四八)。

覚園寺門前地事、任絵図際目之旨、厳密退散敷地居住之輩、念可被致築地修功之状如件、

文和二年十一月六日 尊氏(花押)

左馬頭殿

覚園寺の門前の地は室町幕府が安堵しており、その証拠に絵図があった。この当時、覚園寺では築地の修築が行われており、覚園寺は違法に敷地に居住するものを退散させることを幕府に申請した。幕府はそれを認めたが、証拠は絵図であった。「門前地」が善宝寺寺地図の「善宝寺々内」「善宝寺々地」にあたらう。寺にとって寺内・寺地を明確に記す絵図は寺地の安堵にとって重要な証拠文書であった。

一方、安堵の絵図以外では訴訟図と境界図が考えられる。しかし、訴訟図の場合は相論当事者の名前や境界が朱線などで表記される場合が多い(越後国荒川保・奥山莊堺相論和与図など)。また、境界図は寺域内の建物などを描き境界線を引いている(称名寺結界図)。善宝寺寺地図にはこうした区画線はみあたらず、「善宝寺々内」「善宝寺々地」の文字が書き込まれ、「善宝寺々地」の四方の領域には薄い墨で下書き線が引かれ、その内側に笹竹などが描き込まれている。以上の点から、善宝寺

寺地図は善宝寺の境内と寺地を示した絵図と考えられる。そして、「善宝寺々地」の東に米町の町並みが向かい町の形で描かれていることをみると、「善宝寺々地」は小町大路から教恩寺へ入っていく道筋より北側の区画ではなからうか。

それでは、「善宝寺々内」「善宝寺々地」の二つを結ぶ橋がなく、西側の若宮大路に向かう場所に二つの橋が描かれるのはどうしてだろうか。このことは「善宝寺々内」の文字の右側に薄く墨線がひかれ二棟の建物につづいていることと関係するだろう。墨線は北側の区域にみえ、細道として南北にたつらなっていたのだろう。「善法寺々内」と結ぶ墨線は善宝寺境内に入る道だろう。このことから考えると、寺内と寺地はどちらも若宮大路側から橋をわたって入るのが主なラインだったのではあるまいか。そのために二つの橋が描かれ、特に延命寺橋が大きく描かれるのは寺地への入口だったからだろう。さらに、「善宝寺々内」と「善宝寺々地」のどちらに重点がおかれたかという点、下書き線のある「善宝寺々地」が主体と考えられ、ここをめぐる安堵のための絵図と考えるのがよいのではなからうか。

二 善法寺分年貢注文の検討

次に、明応六（一四九七）年の善法寺分年貢注文を検討することとしたい。その全文は以下のようである（光明寺二二、神保六四一〇）。

〔端裏書 誦首座〕

善法寺分

二百十坪 寺之給

年貢 八百四十文

米町

浄本

鎌倉善宝寺寺地図小考（福島）

四百十坪	合百六十五坪	米町青物屋	三郎次郎
廿五坪	六百六十文	同	同人
百十坪	中紙屋	右衛門四郎	
五坪	四百六十文	同	同人
五坪	廿文	注子	木村源四郎
百六十坪	六百四十文	注子	源次五郎
二百四十五坪	九百八十文	塗子か注子	安井源三郎
百十九坪	四百七十六文	嶺崖銀細工	源三郎
七百五十坪	三貫文	塗子か注子	宗珍
三十六坪	百四十四文	塗し	助四郎
四十坪	百六十文	中座	七郎大郎
合千八百四十五坪	都合七貫三百八十文		

明応六年七月廿五日

年貢 夏秋共二

注文は一紙で、冒頭に「善法寺分」とあって、上段から土地の広さと性格、年貢量、屋敷・在家の所在地と住人が記されている。文書の性格をみると、善法寺分年貢注文の「善法寺」と善宝寺寺地図の「善宝寺」は同一のものと理解されてきた。はたしてそうなのであろうか。一方、両者の筆法を共通する「善」についてみると、前者は横への線のみ出しが狭いのに対して、後者は横にのびやかに引かれている。この点から注文と寺地図の筆者は明らかに別人といえる。注文と寺地図は少なくとも一体として作成されたものではなかった。

善法寺分年貢注文の作成事情は、端裏の「誦首座」が手がかりである。「首座」は禅宗寺院で修行僧中の第一座の僧をいい住持の次位にあ

る役職であった。¹⁴そして、川本氏が指摘するように諦首座は鎌倉山崎宝積寺の文諦首座のことである。¹⁵その関連文書は①三浦道寸（義同）書状と（光明寺二八）、②上田正忠書状である（光明寺四七）。

① ^{（竊書）}一（切封墨引） 一

郡内久野谷郷之内中之村^{龍崎分}之事、此方成敗之間、御知行不可有相違候、恐々敬白

十月廿六日

道寸（花押）

文諦首座

②就太田郷之事、腰文具令披見候、自何方も申子細候者、相心得及返答候、恐々敬白、

上田

四月廿四日

正忠（花押）

諦首座

侍司

①三浦道寸書状には「郡内久野谷郷之内中之村^{龍崎分}之事、此方成敗」とあって、相模国三浦半島を掌握している三浦道寸が龍崎氏の得分を文諦首座に与えたものである。三浦道寸は俗名義同で、永正一三（一五一六）年に伊勢宗瑞に滅ぼされた（『北条記』『北条五代記』等）。万里集九の『梅花無尽蔵』には集九が「道寸翁」と面会していることがみえ、これは長享二（一四八八）年のことと考えられ、また、道寸が三浦氏の家督を継承したのは明応三（一四九四）年とされている。¹⁶したがって、①は明応三年以降の文書となる。一方、②の上田正忠は文亀二（一五〇二）年ころには相模国守護上杉朝良の守護代で永正一七（一五二〇）年には没したとされる。¹⁷①②ともに扇谷上杉朝良方の人物であり、文諦は

明応三年以降には扇谷上杉氏から安堵をうける立場にあったことにな

る。したがって、善法寺分年貢注文は文諦が鎌倉山崎宝積寺の管理下にあった段階のものということができよう。善法寺分年貢注文は宝積寺の文諦首座への得分となり、善法寺は山崎宝積寺の末寺と考えてよからう。文諦は「住持」「長老」ではないが、①より三浦郡内久野谷郷に得分をもち、善法寺の門前地の地子の取得権も有していた。文諦が属する鎌倉山崎宝積寺は、扇谷上杉氏にとっては自身の基盤を形成する重要な寺院だったこととなる。

次に善法寺分年貢注文の内容を検討してみたい。注文は明応六（一四九七）年で、鎌倉に大きな被害を及ぼしたとされる明応四・七年の地震の間である。地子は一坪四文で、夏・秋の年二回の徴収であった。鎌倉の門前の地からの地子徴収の文書には貞和四（一三四八）年の円覚寺門前屋地注文があり、「見心地十六間〔中居小番地之並／居者随一／地子六十四文定〕とみえて一間あたり四文の賦課である（円覚寺文書、神泉三九九四）。一間・一坪の違いはあるが四文の賦課は共通している。

間別・坪単位の違いはあるが、賦課の仕方は継承されていたと考えられよう。

次に、門前住人をみよう。地名には米町・中座・辻子・塗子か辻子がみえ、生業では青物屋・紙屋・塗子・嶺屋銀細工がみえる。鎌倉期の商業地である米町の性格は継承されていた。その都市としての性格は「辻子」（ツシ）にもうかがえ、高橋康夫氏は辻子が「高密度生活空間の開発を目的として旧来の街区に新たに開通された道」とされており、一方、中座は豊田武氏が京都・奈良・鎌倉の商工業区域に設けられたもの

で、商品の販売を目的とする手工業者が仕事場を兼ねた店を出しており、京都では町座、奈良・鎌倉では中座と呼んだと指摘されている¹⁹。善宝寺寺地図の寺地の界限に創建された中座山教恩寺について、口伝によれば中座は教恩寺の入口あたりと伝えられることは、注文の範囲もこのあたりに関わることを示している²⁰。

善法寺分年貢注文には、塗師や銀細工などの職人や野菜などを商う物屋や紙を商う紙屋のような流通を媒介とした店がみえ、都市の商工業区域の性格が濃厚であった。住人の構成と善法寺の関与のありかたを考えた場合、米町の浄本に「二百十坪^{寺之給}」とあるのは善法寺からの給分拝領とみなすことができ寺地の管理者の側面をもっていたのではなからうか。一方、住人の多くは苗字がなく名前のみであるのは彼らが百姓身分に属するものと推察される。その生活形態は、米町の青物屋の三郎次郎に一四〇坪と二五坪の二筆、中座の紙屋の右衛門四郎に一一〇坪と五坪の二筆があり、同じ寺地内に複数の屋地をもっていたしるしである。彼らには善法寺の寺地以外の近隣にも屋地をもったものがいたであろう。また、塗子か辻子の宗珍は七五〇坪と大規模な屋地をもっていた。宗珍は塗師らの職人を束ねるような存在ではなかったろうか。

実際、米町遺跡の発掘調査の結果は右の内容と符合している。発掘地点の多くは国道一三四号線以南の地点で、善宝寺寺地図の米町の南側の地域に入る部分が多い。米町には建武五（一三三八）年の小早川景宗讓状に御家人小早川氏の屋地として「鎌倉米町屋地」がみえるのだが（神皇三三五二）、これに類する場合は現在のところ確認されていない。小さな区画の発掘が多く断片的な調査であるため、地域の性格を知るために地番に近い発掘地点の報告を順に記載する方法で出土遺物を中心にみて

鎌倉善宝寺寺地図小考（福島）

おきたい。

①大町二丁目九三三番地は米町辻南側で、多量の木片、箸状木製品、草履の芯材、骨製筭が出土し²¹、②大町二丁目二三一二番四・一〇では、深さ一〇cmの鎌倉石を敷きならべた石組み遺構（倉庫か）がみられ²²、③大町二丁目二三一二番四・一〇は逆川橋北側で京都鳴滝産砥石・天草産中砥・伊予中砥・長崎県西彼杵産砥などが出土している²³。右にみた木製品などの加工品は、以下の地点でより顕著となる。④大町二三一三番一五は逆川東岸で多量の木製品や曲げ物の木皮、フイゴの羽口²⁴、⑤大町二丁目二三一五番外地点は逆川橋付近で「魚町」に含まれ、板草履芯・鑿・鞆羽口などが出土している²⁵。

一方、報告書には「室町中期」「一五世紀中期」以降に遺構・遺物が激減すると記載されているのは、⑥大町二丁目二三一三番一五地点、⑦大町二丁目二三二〇番一である。立地は、⑥が魚町橋・逆川橋周辺地点、⑦が敷地南側が逆川と、逆川の北側である。⑥は一五世紀中期に検出遺構が激減するとされ、その前段階は木製品の生産工房址かと推定される遺構があり、黒色漆塗り絵碗・箸・曲物・串状製品・匙状製品・草履・篋・杭などが出土している²⁶。⑦では上部の一期は鳥居跡で遺物はほとんど出土せず、社は室町中期以降に創建されたと推定されている。その前段階は町屋遺跡で、居住者は草履芯職人・下駄職人・折敷職人・傘職人・鋳物師・傀儡師などとされている²⁷。さらに、寺地図の西南部に近い⑧大町二丁目二三九八番・二四〇〇番三の下馬交差点東・逆川隣接地点では、草履芯・篋状製品・箸状木製品が出土している²⁸。

米町南部地域には木工・漆工芸・金工関係の職人が集住していたが、南部の逆川に隣接する地域では一五世紀後半に遺構・遺物の激減する区

域が存在した。滑川河口に近い地域は砂州裏側の沼沢地に近い場だったことが知られており、何らかの事情が背景にあるろう。とはいえ、発掘の成果は注文の内容と通底するものであると理解されよう。

まとめておこう。善法寺分年貢注文は山崎宝積寺の文諦首座が取得する地子得分を書き上げた注文で、寺地に権利をもつ職人・商人らの住人が書き上げられており、善法寺は住人浄本に給分を与えて管理していた。住人の居住地は米町・中座の表記から教恩寺の界限とみることができるとする。三 善宝寺寺地図と善法寺分年貢注文のあいだ

以上の考察により、善宝寺寺地図は寺内と寺地の安堵に関わる絵図、善法寺分年貢注文は山崎宝積寺の文諦首座が取得する地子得分を書き上げた注文とみることができる。寺地図は年代不明、注文は明応六年である。ただし、善法寺は注文の「諦首座」の記載から禅宗関係の寺院、文書が伝来した津久井光明寺が臨済宗であることから、善法寺の注文は善宝寺の絵図よりも後においたほうが妥当であろう。善宝寺に関わる資料が浄土・律系のものである理由である。その際、新たに建立された善法寺は善宝寺の再建を背景としており、善宝寺寺地図は善法寺の権利を守る証拠となったであろう。そのため、善宝寺から善法寺へ寺院が継承されていれば、寺地図の内容は注文に記された場を含んでい、または継承されているだろう。そこで、注文の地が寺地図に矛盾なく入り込める場所はどこか考えてみたい。

善法寺分年貢注文の地の総量は一八四五坪、六〇八八㎡となる。注文

には米町・中座があるから、その場は「善法寺々地」付近が想定される。「善宝寺々地」は西と西北の境界がえびす堂川に接するように描かれ、米町の本体とは距離がある。現在と対応させると、延命寺橋から大町四ツ角に至る県道三二一号线より北側、県道三二一号线から北にぬける小路が米町会館に向かう筋の両側の区域、その東側の教恩寺との境にある道の範囲が想定される。ここはえびす堂川から東西約七〇〇〜八〇〇m、南北約七〇mであり、その面積は寺地の六〇八八㎡の広さに近似する。このなかには中座が含まれており、注文に記載された土地と「善宝寺々地」は継承関係にあるとみるのが妥当だろう。そうすると、宝積寺の文諦が善法寺の寺地の地子得分をもっていたわけだから、善宝寺が善法寺に移行したとするのが妥当となる。

それでは、善宝寺から善法寺への移行の原因と背景は何なのだろう。この時期、明応四（一四九五）年と同七年の地震があり、明応七年の地震は東日本全般に被害をあたえたことが知られている。²⁰ 明応四年の地震の内容は、『鎌倉大日記』明応四年八月一五日程に次のようにみえる。

八月十五日、大地震、洪水、鎌倉由比浜海水到千度檀、水勢大仏殿破堂舎屋、溺死人二百余、九月、伊勢早雲攻落小田原大森入道、

八月一五日に大地震があり、由比ヶ浜にいたった津波が「千度檀」までいたり、鎌倉大仏の堂も破壊されたとある。「千度檀」は段葛で、寺地図から段葛は下馬橋付近までであった。この内容については、『熊野年代記』明応四年八月一五日程に鎌倉大地震と明応七年の地震・津波が併記されていること、近衛政家の『後法興院記』明応四年八月一五日程に京都での地震がみえることがその傍証資料となっている。

一方、九月の伊勢宗瑞（早雲）が大森氏を攻めて小田原城を落城させ

たのは明応四年が通説とされてきた³⁰⁾。現在では、宗瑞が明応三年九月には扇谷上杉朝良の援軍として相模で山内上杉顕定の軍勢と戦い、翌四年には甲斐で武田氏と戦っていることに符合する時期ではあるが、大森氏は明応五年七月にはいまだ小田原に在城していて、宗瑞の小田原城の確保は明応五年八月以降のこととみられている³¹⁾。とすると、『鎌倉大日記』の明応四年九月の小田原城落城の記事は、明応五年の可能性が発生し、明応四年の地震の記事の信憑性がゆらぐこととなる。寺地図の「善宝寺々内」の建物の乏しい表現は、明応四年の地震を認めた場合は地震による建物の破壊の可能性、認めない場合は衰退した善宝寺が宝積寺に引き渡されることとなった事態、また、安堵の関係のみを重視するとその場所のみが寺地図に描かれたともみることができよう。

それでは、津久井光明寺には善法寺文書のうち善法寺年貢分注文のみしか伝わらなかったのだろうか。『新編相模国風土記稿』の青山村光明寺には中世文書等を伝来した龍徳院以下の八院・庵が光明寺の塔頭にみえるものの善法寺はみえない。川本慎自氏によれば、光明寺の前身の鎌倉山崎・津久井桐ヶ谷の二つの宝積寺は当初は円覚寺派だったが、一五世紀中期には建長寺派に移り、やがて山崎宝積寺は廃絶し、桐ヶ谷宝積寺は永正二（一五〇五）年以前に大破し、大永四（一五二四）年にはすでに「桜野光明寺」として桐ヶ谷から現在の場に移転していた³²⁾。善法寺は右のいずれかの時期にすでに廃絶していたとみられよう。

参考となるのは相模国三浦郡和田龍徳院だろう。龍徳院は長享三（一四八九）年三月日の上杉朝良禁制の対象で、この時は三浦郡和田にあった（光明寺一八）。龍徳院も、上杉定正書状にみえるように所領を一文諦蔵主ニ与奪」と管理権を文諦蔵主に移していた（光明寺一九）。文諦

は明応六（一四九七）年以降は首座であり、蔵主は首座よりも立場が低い。したがって、蔵主の時期はそれよりも以前のことだろう。文諦は和田龍徳院・善法寺を兼帯していた。

ところで、龍徳院のあった三浦郡和田は三浦半島の京急三崎口駅をおりた水田地帯の一角に位置している。水田地帯は入江を埋め立てたものである。龍徳院は御崎口の入江に面した場にあった。善法寺と関わって記された善昌寺は浄土宗鎌倉光明寺の僧が関与したことが指摘されている（注（二）参照）。明応の地震などにより衰退した寺院の再興の状況は、鎌倉光明寺の長老観音祐崇の事績にみることができよう。再興した寺院には、駿河小川教恩寺・府中宝台院・小川教年寺・元市場法源寺・江尻江浄寺、武蔵品川願行寺・赤岩源光寺、相模三浦法幢寺・三浦正行院・乱橋九品寺、上総木更津選択寺と多くが湾岸部にある³³⁾。三浦正行院の開山祐崇は文亀三（一五〇三）年の没とされる（『新編相模国風土記稿』）。そのうち駿河国焼津の浜沿いにある小川の津波被害は『日海記』により広く知られており、小川教年寺の再興は明応の地震と関係がある。相模国でも三浦法幢寺は浦賀、三浦正行院は横須賀市秋谷、乱橋九品寺は鎌倉大町の南側で材木座に向かう場所であり、先に示した遺跡群と近い場になる。『鎌倉志』の教恩寺の項には浄土宗の鎌倉光明寺の末寺善昌寺の地に教恩寺を移し、元の教恩寺の場所である光明寺境内の北側の山際に所化寮が設置されたところ³⁴⁾は、案外に善宝寺の移転と関わる話を伝えているのかもしれない。

善宝寺から善法寺への移行は明応六年以前には行われており、善法寺が引き継いだはずの「善宝寺々地」の近隣には浄土宗系の僧の活動もあって時宗寺院・教恩寺が建つこととなる。善法寺の本寺・山崎宝積寺

の衰退のなかで津久井の桐ヶ谷宝積寺に一本化するなかで、善法寺が桐ヶ谷宝積寺の後身の光明寺に継承されなかったのは、明応七年の地震が関わっているのかもしれない。

おわりに

善宝寺寺地図と善法寺分年真注文の文書の性格をみると、明応六年の注文は鎌倉山崎宝積寺の末寺だった善法寺の寺地の地子得分が宝積寺の文諦首座の得分であることを記したものである。一方、善宝寺寺地図はその寺内と寺地の安堵を目的に作成された絵図で、善宝寺は律・浄土系の通世系の寺院とみられる。善宝寺の廃絶後に、善宝寺の寺地などは宝積寺の管理下に移り、やがて善法寺として再興された。

善宝寺から善法寺へと移行した直接的部分は注文にみえる分で、それは寺地図の「善宝寺々地」に連続するものとみられ、教恩寺の境内西側からえびす堂川にいたる長方形状の土地と推定される。その際に問題となるのは、宝積寺を継承した津久井光明寺に明応七年以降の善法寺の文書が伝来していない点である。移行前後に発生した明応四・七年の両度の地震がこの問題に関係している可能性が高い。その理由は、善宝寺の寺地付近に時宗寺院・教恩寺が建立された点にあり、その地に関わる由緒と関わる可能性があるからである。寺地図は、明応四年の地震を認めたとしるその地震前後から以前のすがたを描いたものとなる。一方、注文は善法寺所管のえびす堂川右岸の住人の様相を示したもので、「善宝寺」の部分に善法寺があったと考えるのがいいのではなからうか。その善法寺は津久井光明寺に引き継がれることはなかった。その背景には

明応七年の地震とその後の事情による退転があったと思われる。

注

(1) 吉川弘文館、一九五八年、四八七頁。

(2) 貫達人・川添武胤編『鎌倉廃寺事典』(有隣堂、一九八〇年)。善昌寺(宗旨不明、大町・名越)については、以下のように記述されている。

『鎌倉志』教恩寺の項に、古老の言として「元此地ニ善昌寺ト云テ光明寺(材木座)ノ末寺アリ。廃亡シタル故ニ、教恩寺ヲ此ニ移シ、元教恩寺ノ跡(光明寺の境内北の山ぎわにあったという)ノ所化寮トセリ」とみえている。あるいは前述の善勝寺と同じ寺のことかもしれない。

善勝寺には、以下の関連史料が典拠としてあげられており、次の通りである。検討してみたい。なお、『金沢文庫古文書』は金文と略称で示していた(傍線、福島)。

A、『菩提心論私見聞』奥書(金文識語二二四一)

徳治二年三月廿九日、於名越善勝寺始之、

B、『理趣三昧次第』奥書(金文識語二五三六)

進上人様、

貞和五年正月廿四日、自貞性上人借以於名越善勝寺書寫之了、小比

丘円智通四、俗廿六

C、氏名未詳書状(金文三一七八、整理二八九一・二八九二)

神符当年損得同様令進候、水押と不作莫大損亡候事、歎入候、惣保既及半損之間、同事候敷、抑、油一斗一升令進候、四升は善勝寺厨主、又五升は御影堂令進候、以上二斗は此段有御心得可有御支配候、善勝寺油代四百八十文可被召候、又以兒玉孫三郎入道三結令替進候をり可參候、御年貢隨責出候、可令替進之候、毎事細々示賜令一

D、鎌倉手広青蓮寺不動明王立像銘

永徳元年辛酉十月廿八日、俗年四十九、願主善勝寺住持比丘賢珍法臈

廿五

以上、四点のうちCの紙背聖教は『四分律行事抄中四聽書』(其琰本)である。この聖教は南北朝期の称名寺長老什尊の時期で、文書の宛先は勸学

院である。右の内容から見る限り、善勝寺は善宝寺のある大町・米町の東側の名越にあつて(A)、Bに「貞性上人」がみえる点から律・浄土等の通世系の寺院であつたとみられ、Cからは称名寺・極楽寺と近い関係の寺院であつたと想定される。

- (3) 『鎌倉の古絵図』(鎌倉国宝館、一九九三年)
- (4) 「明応七年(一四九八)の海洋地震―伊豆以東における諸状況―」(『続古地震実像と虚像』、東京大学出版会、一九八九年)
- (5) 「宇佐見遺跡検出の津波堆積物と明応四年地震・津波の再評価、伊東の今昔」(『伊東市史研究』一〇、二〇一二年)
- (6) 「鎌倉における明応年間の『津波』について」(『歴史地震』二九、二〇一四年)
- (7) 「光明寺と二つの宝積寺」(『津久井光明寺』、神奈川県立金沢文庫、二〇一五年)
- (8) 本絵図は『神奈川県史 資料編(三上)』、『鎌倉の古絵図』(前掲)、『津久井町史 資料編 考古・古代・中世』(二〇〇七年)、『時代を作った技―中世の生産革命―』(国立歴史民俗博物館、企画展示図録、二〇一七年)等に収録されている。
- (9) 『津久井町史 資料編 考古・古代・中世』では「善宝寺之内」、「善宝寺之地」と読解したが(翻刻・福島金治)、「善宝寺々内」「善宝寺々地」と訂正する。
- (10) 建物があつて省略されたのか、建物がないことを意図的に示したものなのか、考慮する必要があるが、いずれとも断定しがたい。
- (11) 「中世鎌倉歴史地図 第七図」(『鎌倉市民』一一〇、一九六九年)
- (12) 古川元也『中世鎌倉地域における寺院什物帳(文物台帳)』と請来遺品(唐物)の基礎的研究』(科研報告書、二〇一五年、収録)
- (13) 百瀬今朝雄「北条(金沢) 顕時寄進状・同書状案について」(『弘安書札礼の研究』、東京大学出版会、二〇〇〇年、初出は一九九〇年)
- (14) 『日本国語大辞典 第二版』(小学館、二〇〇一年)、織田得能『織田仏教大辞典』(大蔵出版、二〇〇五年)。
- (15) 前注(7)川本論文。
- (16) 真鍋淳也『三浦道寸』(戎光祥出版、二〇一七年)。「道寸」は、明応五年鎌倉善宝寺地図小考(福島)

年の上杉顕定書状に「三浦道寸」とみえる(伊佐早謙採集文書、『新編横須賀市史 資料編 古代・中世II』二一九〇)。

- (17) 黒田基樹『扇谷上杉氏と太田道灌』(岩田書院、二〇〇四年)
- (18) 「辻子その発生と展開」(『京都中世都市史研究』、思文閣出版、一九八三年)。なお、鎌倉の辻子は京都の辻子に源流があり、保の制度などとも、鎌倉幕府が京都から取り入れたものとされている(『鎌倉市史 総説編』、一九五九年、三〇〇頁)。鎌倉では宇都宮辻子・田楽辻子がよく知られているが、宇都宮辻子が小町二丁目の雪ノ下カトリック教会と鎌倉彫会館との間を通る横道、田楽辻子が筋違橋を起点にして北条屋敷(宝戒寺)の北側から滑川を渡り川の向かい側に沿って大御堂ヶ谷の入口を通り、釈迦堂ヶ谷入口を東に進み、宅間ヶ谷から六浦路に合流する小路とされている(『三浦勝男編』鎌倉の地名由来辞典、東京堂出版、二〇〇五年)。高橋氏の指摘とほぼ見合っている。
- (19) 「中世の原始諸産業および手工業」(『中世日本の商業 豊田武著作集第二巻』、吉川弘文館、一九八二年)
- (20) 三浦勝男編『鎌倉の地名由来辞典』(東京堂出版、二〇〇五年)。なお、教恩寺付近の通称地名は「松登」という(齋木秀雄他執筆『米町遺跡―第6地点、第7地点発掘報告書―』、二〇〇〇年)。
- (21) 『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告 六 平成元年度発掘調査報告』(田代郁夫・原廣志執筆、一九九〇年)
- (22) 降矢順子「米町遺跡の調査」(『鎌倉考古』四一、一九九九年)
- (23) 「米町遺跡―第6地点、第7地点発掘報告書―」(齋木秀雄他執筆、二〇〇〇年)
- (24) 瀬田哲夫「米町遺跡の調査」(『鎌倉考古』四四、一九九九年)
- (25) 『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告 11 平成六年度発掘調査報告 第一分冊』(馬淵和雄等執筆、一九九五年)
- (26) 『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 一〇 平成一二年発掘調査報告 V』(瀬田哲夫執筆、二〇〇一年)
- (27) 『神奈川県・鎌倉市 米町遺跡発掘調査報告書―第10地点―』(齋木秀雄・降矢順子執筆、二〇〇五年)
- (28) 『米町遺跡発掘調査報告書―鎌倉市大町二丁目二三九八番・二四〇〇番』

三一、齋木秀雄執筆、二〇一五年)

(29) 矢田俊文「二四九八年の地震被害 京都・伊勢」『二四九八年の地震津波被害 駿河・遠江・紀伊』(『中世の巨大地震』、吉川弘文館、二〇〇九年)

(30) 佐脇栄智「北条早雲・氏綱の相武計略」(『神奈川県史 通史編1 原始・古代・中世』、一九八一年)

(31) 佐藤博信「大森氏の時代」『小田原北条氏の成立』(『小田原市史 通史編 原始・古代・中世』、二〇〇〇年)

(32) 前注(7)川本論文。

(33) 『檀林光明寺志』(『鎌倉志料』第二卷)。

(34) 前注(2)参照。

〔追記〕 本稿は二〇一七年九月九日に行われた神奈川県立歴史博物館・梶野セミナーでの「戦国時代の鎌倉の町―鎌倉善宝寺絵図について―」にもとづいている。講座を担当された古川元也・渡邊浩貴両氏には講座の後に多くのご教示にあずかった。また、光明寺地図の掲載にあたっては、光明寺の渡邊雅光様の御許可をいただき、神奈川県立金沢文庫から写真の提供にあずかった。感謝申し上げます。